養育家庭体験発表集

（平成１８年度）

東京都福祉保健局少子社会対策部

「養育家庭体験発表集」の発行にあたって

都内には、様々な理由で親と一緒に暮らすことのできない子どもが約3,900 人います。このような子どもたちを、実の親にかわり、家庭的な環境の下で育てているのが「里親」です。

都の里親制度は、「養育家庭」と「養子縁組里親」に大きく分かれています。とくに、養子縁組を目的としないで、子どもを家族の一員として迎えていただく里親を「養育家庭」、又は「ほっとファミリー」という愛称で呼び、普及啓発につとめています。

そして、このような子どもの状況とほっとファミリーを理解していただくため、都では各区市町村と協力し、養育家庭体験発表会を開催しています。

この冊子は、平成 18 年度に開催された養育家庭体験発表会において、ほっとファミリーの方々に発表していただいた内容を要約し、冊子にまとめたものです。

初めて子どもに出会ったときのことや交流中の出来事、委託後の子どもの赤ちゃん返りや問題行動などへの対応など、子育てに奮闘している様子が描かれています。また、真実告知や実子との関係など、里子を育てることゆえの悩みについても語られています。

しかし、そういったご苦労の中にも、子どもが少しずつ家庭になじんで心が通じ合っていくのが実感でき、ほっとファミリーをやっていて良かったというものや、子どもから喜びや幸せをもらっているというものなど、ほっとファミリーとして経験した子育ての素晴らしさにも触れています。

より多くの都民の皆様にお読みいただければ幸いです。

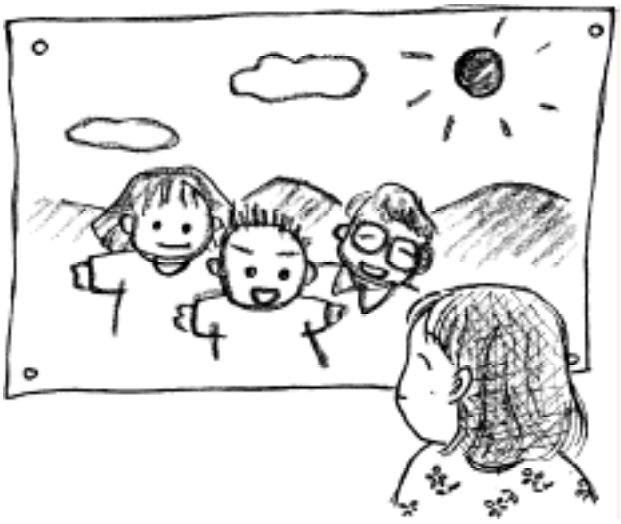
平成１９年１０月

東京都福祉保健局少子社会対策部育成支援課長
松　山　　祐　一

目　　次

1　子どもの内側から輝くものが見える ・・・・・・・・・・・・・・ 2
2　「熱い」ほっとファミリー始めました ・・・・・・・・・・・・・・ 4
3　愛を育てる ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
4　里親とは、また違う人生を歩くきっかけ ・・・・・・・・・・ 8
5　18年の里親生活とそこで暮らした実子の気持ち ・・・・ 10
6　私の大事な宝物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
7　自立をめざして ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
8　お母さんから生まれたかった ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
9　子どもの笑顔が元気の源 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
10　兄弟が2人から3人に ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
11　子どもたちに感謝！ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
12　うちに来て良かったね ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
13　頼もしいお兄ちゃん ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
14　どうしてお母さん、いてくれないの？ ・・・・・・・・・・・・・ 28
15　44歳秋、新たな暮らしが始まりました ・・・・・・・・・・ 30
16　里母への『韓国語の応援歌』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
17　インタビューに答えて ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34

養育家庭体験発表会に、ようこそ！！



この体験発表集には、１９人のほっとファミリー、実子の方たちの養育体験が赤裸々につづられています。

より多くの方々に、この養育家庭制度を知っていただき、ご理解と共感を得られることを、何よりも願っています。

そのことが、ほっとファミリーの方と、そこで生活する子どもたちを支えることにつながるのです。

１　子どもの内側から輝くものが見える

【里母】

私たち家族は、昨年まで夫と私、そして８歳になる長女の３人で暮らしてきました。長女の出産が危険を伴ったため、子どもは一人だけにしようと思っていましたが、里親に関する広報や本を目にして、この制度に関心を持ちました。手始めに、近くの養護施設でフレンドホーム登録をしたものの、該当する子どもがなかなか現われず、養育家庭登録に切り替えて、今年３月、当時３歳４か月のＡちゃんを受託しました。

Ａちゃんとの出会いは昨年 12 月、彼女が３歳１か月の時でした。生後半年から乳児院にいて、健康で発達は順調、手先が器用で、年下の子の世話を進んでするなどの長所がある一方で、人見知り、場所見知りが強く、見慣れぬ人が側にくるだけで泣き出すことがあると聞きました。面会に行くと、Ａちゃんは大抵髪を素敵に結うなどのおめかしをして迎えてくれるのに、私たちの声かけに答えることは少なく、職員が離れると泣いてしまいます。私と目が合うと「だめ。」、「ママ嫌い。」と言うし、私からのプレゼントを「担当の先生にもらった。」と話すこともありました。お別れする時は笑顔でバイバイできるし、職員とは「今日ママ来たね。」と、話題にしているというのに、なかなか関係が深まりませんでした。しかし、嬉しかったのは、初めからＡちゃんは長女が好きらしくて、二人で手をつないで別室に行けたことです。出会いのタイミングもよく、彼女は乳児院を出る年齢に達していたし、私たちは、もう紹介がなければ里親をやめようと話し合っていたので、せっかくのご縁だから徹底的に向き合おうと決めました。

出会いから１か月半後に長期外泊に入ったのですが、Ａちゃんは家に着いて１時間半、大声で泣き続けました。その日、口にしたのはすったリンゴとクラッカー、夜はお風呂もお布団も抱っこも拒み、家族から離れた居間の片隅で 12 時前、力尽きて眠りに落ちました。その後も、初めて自転車の幼児席に座った時やタクシーに乗った時、怯えて泣き、小児科で、歯医者で、美容院で、プールで、嫌がって泣きました。一方で、最初の半年は精力的に周りを探索し、お風呂でおしっこをしたり、ソファーの下に物を隠したり、トイレの水に手を入れてピチャピチャしたり、ごみ箱から空の菓子袋を出してなめるし、コンセントに物を入れようとします。鉢植えの花びらをむしり続けた時は、あたりにピンク色の絨毯ができました。「熱いから鍋には触らないで」と言うとぱっと手が出ます。言葉でのコミュニケーションが取りにくく、発音が不明瞭でしたので、私がゆっくり言い直し、ストローを用いる簡単な発音練習も試みました。語彙が少なく、「かわいい」、「おかしい」など、お気に入りのフレーズを的外れに叫ぶかと思うと、「昨日、鬼が来てね、Ａが食べられてね。」と、現実離れしたことを言う。苦手なことをできたと偽り、失敗を人のせいにする。つい先ほどの出来

事も、「わかんない」、「忘れた」と答えるし、気持ちが伝えられないせいか、他の子を突き飛ばす、噛むといった行動もありました。落ち着きがなく、急に飛び出す、高い所に登る、後ろ向きに倒れるといった行動に肝を冷やしました。

私たちの前で他の人にべたべたする時期もありました。６月半ばからは、嬉しそうに私の指を一本ずつ口に含んで吸うかと思うと、手足や胸のあたりを服の上からなめるようになりました。その後哺乳瓶を渡すと、私をなめることは少し減りました。過食も見られ、ふりかけ御飯のほか、カレーやケチャップ、マヨネーズなど、味の強いものを実にたくさん食べました。大変な時期でしたが、良かったのはＡちゃんが丈夫で病気を一度もしなかったことと、起床や入眠などの生活リズムが安定していたことです。食事も手づかみで食べていたのが、外泊を始めて２か月後には箸が使用できました。Ａちゃんにはユーモアのセンスがあり、一緒に笑ううちに気持ちが軽くなりました。３歳９か月でおむつ外しが完了した頃から、全体的に言動がまとまってきて、Ａちゃんの内側からは輝くものが見える気がすることがありました。

最近のＡちゃんは、前向きで朗らか、繰り返し挑戦するたくましさ、人に対する寛大さなどが育ち、しばしば畏敬の念を抱かせます。人前に出て一人で歌ったり、運動会の競技に楽しく参加できるようにもなりました。地元スカウト団の夏キャンプにゲスト参加して、小学校中学年に混じって３時間山登りをして驚かれました。言葉の進歩も目覚ましく、発音もきれいで、絵本の朗読やゲームも楽しんでいます。出会って一年もたたずにこれほど変わるとは、人の可能性の大きさに、感慨を新たにしています。この一年は、Ａちゃんの素晴らしさに自分の心の壁も少しずつ広がっていった日々でした。また、何とかやってこられたのは、周囲の方々の支援のおかげだと思います。

そして大きかったのは長女の存在です。穏やかで思慮深い彼女の存在がＡちゃんを我が家に呼んだのだと思います。Ａちゃんは今も長女が大好きで、朝は家の外まで送りに出ることがあります。幼稚園で作った工作物に、「お姉ちゃんが喜ぶから、お姉ちゃんと一緒に使うから、自分と長女の両方の名前を入れて。」と頼んだそうです。長女にはいろいろ我慢をさせましたが、Ａちゃんがいてくれるからこそ味わえる楽しみもあるし、共に暮らした記憶がやがて長女自身の人生を支える糧となると信じます。

Ａちゃんとは時折彼女自身のライフストーリーについて話し合っていますし、将来産みの親を求めることがあれば私たちも応援したいと思います。今後もさまざまな方とつながりつつ、Ａちゃんの成長を見守りたいと思っています。

２　「熱い」ほっとファミリー始めました

【里母】

現在、３歳半の女の子のＢ子ちゃんを育てています。うちに来たのは２歳８か月の時ですから、９か月目に入りました。

乳児院に面会に行っていた時には、寄ってきて抱っこや遊びをせがむ子もいるのに、Ｂ子は絶対に寄ってきませんでした。乳児院の子どもたちは、先生方のほかにもボランティアの方や実習生や見学者が来るので、外部の人に慣れているそうですが、Ｂ子は先生にべったりでした。何回かの面会を経て個別の面会に入っても、Ｂ子は身辺のことをやらせてくれませんでした。子どもながらに何かを感じとっているのだと、自分の身に何かが起こるのを察しているのだと、私は胸がキュンとなりました。先生が「乳児院で何十回面会しても、小さい子どもなりに決心が決まらないだろうから」とおっしゃられたので、Ｂ子をうちに連れてきました。ある時、「先生はお仕事に行くからね」と乳児院の先生はお帰りになり、その日からうちの子どもになりました。

抱っこして屋上で外を見せた時のこと、何を思ったのか、「Ｂ子、ここにいるからねー！」と言ったことがありました。誰に向かって言ったのか、お父さんやお母さんに向かって言ったのか、それとも乳児院の先生に言ったのか。私は「ここで暮らそうね。」と話しました。

ちょっと肩に力が入った感じで、Ｂ子との生活が始まりました。万事順調かというと、そんなことはありませんでした。Ｂ子は何か気にいらないことが発生すると、フィギュアスケートの荒川選手のイナバウアーのようにのけぞるのです。原因はほんのささいなことか、私には理由がわからないことで、イナバウアーで、大泣きです。それも 30 分でも１時間でも平気であの格好で大きな声で泣き続けていました。初めの１か月ぐらいは毎日、乳児院のソーシャルワーカーの先生に、「昨日もイナバウアーしました。」、「今日もイナバウアーしました。」と電話していました。でも、家庭の中で密室にならないで、そういうふうに毎日言えていたということは、とても良かったと思っています。

養育家庭の制度を知ったのは、１年ほど前に図書館で読んだ坂本洋子さんの『ぶどうの木』がきっかけでした。なぜその本を手に取ったのかは、ただ引き寄せられて偶然だった、としか思えません。ちょうどその頃、夫から「○○さん家で３歳の男の子を預かることにしたって。」と聞きました。『ぶどうの木』のようなことをすることにしたのだな、と私は驚きもせず、すんなり納得がいったのを覚えています。その知人に相談し、「ぜひおやりなさい。」と言われて児童相談所に電話したのが事の始まりです。

一石二鳥、一粒で二度おいしい、私はこういうことがとても好きです。娘が中学に

あがって私にも余裕がでてきていました。娘は一人っ子だし、妹ができたら良いのではないか、家庭で育つことがいいのではと考えました。また、娘が小さい時には気持ちにゆとりがなく、子育てどころではなかった自分がいて、それをやり直したいという気持ちもありました。一石五鳥です。

９か月目の今の状況をお話します。Ｂ子はとても活発で、一時もじっとしておらず、いつも走っています。コラッと追いかけても本気にならないと追いつけません。１日中しゃべり続けているので、こちらはぐったり…。ほとほと疲れます。知らず知らずのうちに「んーもう！Ｂ子は！」と言うのが私の口癖らしく、何かやらかすと叱られる前にＢ子は上手に私の口真似をして言います。笑ってしまいます。生まれた時から育てていれば、何かが「できる」ようになっていく過程がずっと見られます。いたずらが「できるようになる」ということが親にとって喜びになります。ところが、ポンと２歳の子どもが来る場合には、今まで大人が静かに暮らしていたところに、「怪獣」Ｂ子が来るわけです。これはやはり実子を育てるのとは違った状況です。久しぶりの小さい子なので、最初、受け入れ態勢というか、何をしていいかすっかり忘れていて、Ｂ子には、小さいものから大きいものまでいろんなものを壊されました。とにかく何にでも興味津々で、何にでも手を出したがるのです。

うちは人の出入りが多いのですが、Ｂ子は誰にでも話しかけ、かまってもらって、皆のアイドルです。乳児院では先生のお膝に座るにしても片方のお膝にしか座れませんでしたから、注目を浴びている今はとても楽しそうです。叱られるのさえ楽しいのではないかと思う時があります。
この間、風邪をひいて半日くらい大人しくて楽でしたが、翌朝、元気になってしゃべりまくっているので、お姉ちゃんが「あーあ。元気になっちゃったね…。」とひとこと。爆笑しました。

ふと、何をどう間違って、里親になっちゃったのだろうと思います。特に福祉に興味があったわけでも、子ども好きでも、使命感にかられたわけでもないのに…。自分の時間もとれて、結構楽しく暮らせていたのに…。養育家庭の愛称のほっとファミリーとは、温かい家庭とか、ほっとくつろげる家庭という意味だと思うのですが、我が家の場合は「熱い」ほっとファミリーで、毎日が戦争です。正直なところ、里親になって良かった、皆さんもどうですかというふうに、心底勧められるという心境には至っておりません。自分が大変だという気持ちが今の私の中にあります。でも、私たちの家族はもうＢ子なしには考えられません。壊された物や失った静寂は大きいですが、それをマイナスしても私たち家族が得ているものは大きいように思います。一石二鳥どころか何十鳥になるのでしょうか？　何よりも、世界が広がりました。これから大きくなるにつれていろいろな問題にぶつかっていくと思いますが、その都度、乗り越えていけたらいいなと思っています。

３　愛を育てる

【里父】

私どもには７人の実子がおります。一緒に暮らす長男はもう嫁をもらい、２歳と０歳の孫、さらに私の両親に加え４、５人の同居人がいる大家族です。小さい子どもがいたことや、様々な理由から、なかなか里親登録ができずにいました。人の子どもを育てることは大きな社会貢献です。養育家庭制度ではありませんが、家内の実家は実親が育てられない何人かの子どもを預かって育てており、家内はその子どもたちが立派に成長し幸せになっていくのを小さな頃からみていました。そして、自分も同じように子どもを預かって育てたいと思っていたそうで、夫婦２人で、10年くらい前から実現させたいと思っていました。

ある程度、実子が大きくなった頃、知り合いの方から「子どもを預かってもらいたい。」という話がありました。それをきっかけにして、児童相談所に里親登録の申し込みをしました。昨年の10月に里親登録し、それから現在の里子であるＣ子と面会をするようになりました。

家内と２人で施設に面会に行っていたのですが、その時に驚いたのはそこにいる他の子どもたちが純粋な好奇心なのか、「このおじちゃんとおばちゃんはＣ子ちゃんのお客さんなんだよ。」と言いながら、皆寄ってくるんです。私たちの思い過ごしかもしれませんが、その子どもたちは、このおじさんとおばさんが自分のお客さんであってほしい、自分をこの施設から連れ出してもらいたい、自分の親になってもらいたい、とそういう思いをアピールをしているような印象を受けました。家内は「できることなら、この子たちをみんな預かって育ててあげたい。」と言って泣いていました。子どもたちは血がつながっているとかつながっていないではなくて、お父さん、お母さんと呼べる存在、また自分のほうをじっと見てくれる存在がほしいのかなと感じました。

２度目の面会の時には、里子を連れて３人でファミリーレストランに行きました。注文したものをなかなか食べないので、一生懸命すすめていると、本当にゆっくり食べるんです。初めてだから遠慮しているのかなと思ったのですが、今も本当に食事が遅くて、10人以上の目があるので、いつも誰かに「早く食事をとりなさい。」「もっと早く食べなさい。」と言われている、そんな子です。

そうして、交流がだんだんと深まっていきました。その間、ほとんど毎週末、施設に迎えにいき、１、２泊してまた施設に戻るという生活が続きました。私の仕事がら、毎週というのはすごくきつかったのですが、交流を深めていかないと実際に委託されたときに大変かなという気持ちもあり、頑張りました。

翌年の３月、Ｃ子の幼稚園卒園を待って、正式に東京都から委託されました。Ｃ子の卒園式に出席した際、担任の先生に「○○さんと交流するようになってから（Ｃ子は）変わりました。すごく生き生きしてる。すごく変わって明るくなった。」と言われました。本当に嬉しくて、それだけで里親になれたことをありがたいと思いました。それが里親になったいちばん最初の喜びでした。

今は我が子と一緒のように生活していますが、我が子の時は子育てしているのを意識することはあまりなく、ただ一緒に暮らしていることで子どもとのかかわり合いはありましたが。しかし里子を預かってみると、この子をまっすぐに、少しでも世間の役に立つようないい子に育ってもらいたいという気持ちがすごく強くなりまして、我が子の時はほとんど家内に子育てを任せきりにしていましたが、今は父親として本気で叱って、本気で褒めて、本気で抱きしめるという気持ちでやっています。大家族の中で育っているので、刺激がいっぱいあり、私が言わなくてもいつも他の人が色々言ってくれ、いい育ち方をしているのではないかと思っています。学校の先生からも「明るく元気よく育っています。」と言っていただき、今のところ順調にいっているのかなと思います。まだお預かりして８か月が経ったところなので、まだまだこれから何かあるんじゃないかと感じています。

普段のＣ子を一番よく知っているのは家内なのですが、恥ずかしがり屋で私に発表を任せるので、今日は家内がＣ子について書いた日記を少し読みたいと思います。

「今日、Ｃ子は小さな嘘をつきました。以前より何度も嘘を言うので厳しく言っていたのですが、その後も自分がやったことを他の人がやったと言って主人に叱られました。本人に何度もよく言って聞かせたのですが、理解にかけるのでしょうか。本当にどうしたものかと悩んでいます。今は嘘だったとわかるような嘘ですが、成長するにつれ困った嘘をつくのではないかと心配です。小さいうちに少しでも素直な心を失わないよう、悪いことは悪いとわからせ、ごめんなさいと言えるような子になってもらえるよう育てていかなければと思います。叱っても後で愛情を示してあげなければ、心が離れていってしまうので、本心でかわいいという心を持つようにしています。まだまだ里親一年生ですので、これから共に私も成長していかなければと思います。」

生意気なことを言うようですが、私は愛情というのはもともとあったり感じたりするものではなく、自分がだし、育てていくものという思いを持っています。だから、愛情を自らが出さなければ本当の深い愛は生まれない、生きていることは、周りの人に愛を出していくことだと思い、自分に言い聞かせながら子育てをしています。私も本当にこれからが勉強で、色々なことがあると思いますが、子どもを育てることで自分も成長していければと思っております。

４　里親とは、また違う人生を歩くきっかけ

【里母】

夫婦で里親になってまだ３年です。

どうして里親になろうと思ったか…。私たち夫婦は、ただ、子どもをたくさん育てたいと思っていたのですが、それがかなわず、授かった実子は１人だけでした。年もいっていますが、まだ子どもを育てるエネルギーを少し持っているかな、と思い里親になりました。

この里親になる前には､世界の子どもたちを預かるホームステイをやっていました。アメリカ、ニュージーランド、フィリピン、韓国など、主に高校生の子どもを預かっていました。預かる時、夫は「いやだ、いやだ、他人が家に入るのはいやだ。」と言っておりました。しかし、いざ子どもが家に来ますと、とてもかわいがりました。

里親登録後は、すぐにでも子どもが我が家に来るものだと思っておりました。半年待って、児童相談所から施設入所中の小学校２年生の男児を紹介されました。

早速、施設に会いに出向き、交流を開始しました。そして、交流３回目くらいから、その子を我が家に連れてきて、また施設に帰す、というような外泊交流を半年ぐらい続けました。その間、気になったことは、その子どもの行動でした。つまり、我々が見ていないところで隠れた行動をする、弱いものをいじめるなどでした。８歳の男児を今後 10 年間、しっかりと育てていこうという思いが頭の中にあったので、外泊交流の度に、子どもの行動がだんだんと我々に重くのしかかりました。その子を「育てるか、育てないか」で、主人と悩みに悩みました。そして、悩んだ末に、この子とは縁がなかったということで児童相談所にお断りしました。同時に自信を大きく無くしました。

次に、ホームステイでドイツ人の留学生を預かりました。その子は明るく、青春を謳歌し、生意気ですが、好感が持てた子でした。

そして､そのドイツ人が来た後､韓国からの留学生を夏休みに６週間預かりました。その時、また、児童相談所から小学校２年生の女児の委託依頼の電話を受けました。その子には、姉が２人おり、両親と５人家族で暮らしていましたが、なぜか彼女だけが、のけ者にされた状態でした。学校を転校せずに生活できるとのことで、我が家には２週間ばかり生活しました。その間、家にいる留学生たちに仲よくしてもらいました。私たち夫婦もこの子に情が移り、我が家で預かれるならと思ったりもしました。しかし、余りにも実家が近くて、結局、子どもの安全のため、彼女は長野の施設に行くことになり、元気に出発して行きました。

その子が施設に行った後、ほっとしていましたが、突然、たどたどしい日本語で電話がかかってきました。声の主は、最初にホームステイをしたヒューストンの女の子

でした。その子は新潟の中学校と小学校の英語の先生になるために来たというのです。

その後、穏やかな日が続くかな、と思っていましたら、また児童相談所から電話がありました。高校３年の男子の委託依頼でした。その子はとても賢い子でしたが、将来に希望が持てず暗く沈んでおりました。大学も行かないとあきらめておりました。

しかし、留学生の陽気なドイツ人の若者がいたおかげで、その高校生も随分と救われたような気がします。

しかし、このドイツ人の若者も今年２月に学校を終えて本国に帰ることになりました。彼がドイツに帰った後、里子と私も彼の荷物を運ぶためにドイツに行きました。そして二人でドイツ旅行を楽しんできました。ドイツからの帰国後、その高校生は考えがとても変わりました。しかし高校卒業と同時に措置解除も待っていました。年齢的に自立しなければいけない状態でした。去年の 10 月に来て以来、将来について何も考えていない状態でしたので、ワンルームに彼を住まわせ、自立に向けて今、支援をしている最中です。彼は、アルバイトをしながら家賃も払っています。アン基金でお金を借り、自動車の免許も取りました。今、彼は自立を考え、頑張っています。

ドイツからの帰国後、また児童相談所から連絡がありました。高校２年生の女子を預かってほしいと言われました。その子は有名校に通う優秀な子でしたが、今どきの高校生はこうなのかと、その子と暮らしながら、驚きました。まず、あいさつが出来ません。何しろ本当にびっくりする高校生です。

その子のために提供した部屋は、預かった当初と同じように足の踏み場もないような状態でした。掃除もしたことがないという感じです。「せめて、鼻をかんだりしたごみはごみ箱に。」と言いましたが、そこら辺に全部いろいろのものが散らばっています。

まず、年齢にふさわしい生活を教えることにしました。いろいろ試しました。しかし、そのことを身につけてもらうことはとても辛いことでした。

養育するということは我慢することで、夫と私は随分と成長させられました。本当にありがたいと思っております。子どもを養育することは、夫婦で話し合い、考え、問題に対処していかなければならず、ぼけないで成長させていただいています。子どもたちとのかかわりを通し、１回だけでなく何回も、幾重にも人生を送らせていただいているような気がします。私たちは周囲の仲間や友達、みんなに話をして、悩んでいる時には、こうなんだということを友達に聞いてもらい、話をオープンにし、皆さんに育てていただいているという意識を持っています。お願いします、身近にそういう里親や里子がいたら、どうぞ理解し、相談に乗ってあげて欲しいと思います。

私たちでもこのように里親ができました。やってみようかなと思われる方は、ぜひ一緒にやってみませんか。また違う人生を歩むきっかけとなるかもしれません。

5　18 年の里親生活とそこで暮らした実子の気持ち

【里母】

もう既に 30 何年前になりますが、私が高校生のときに養護施設から高校に通っているクラスメートと出会いました。そんなきっかけで東京に出て福祉の勉強をし、卒業と同時に都内の養護施設で職員として働くことになりました。

その後、たまたま私の後輩が、知的におくれのある子どもを我が家によく連れてきて、せめて１か月でも３か月でもいいから、普通の家庭を体験させてやりたいと熱心に語りました。

それがきっかけで、一番最初に６歳の幼稚園年長の里子を引き受けることになりました。その当時、今日横にいる実子の娘は小学校１年生で、その上に小学校３年生の娘がいました。それからずっと一緒に暮らすことになるのですが、最初は余り考えずに引き受けることになりました。

若い頃は、本当に毎日子育てに夢中で、余裕がなかったのですが、最近は、とにかく子どもがなんとかなるには時間がかかる、見守っていくしかないという気持ちになっています。今もう一度育て直すことができたら、彼も、実子たちも、もうちょっと違う育て方があったのではないかと思うほど、私個人の子どもの育て方も年とともに変わってきているなと感じています。

我が家には、今６人の子どもたちがおりますが、２歳ぐらいで来た小さい子どもたちも、それまでに受けた心の傷はとても深いものがあります。私たちは経験したことがないので、本当にびっくりすることがたくさんあります。例えば、今５歳の幼稚園の年長の女の子ですが、この子は２歳 11 か月のときに我が家に来ました。まず、大人を信用できない、どの大人も恐がっていました。トイレに行くのも恐くて、火のつくように泣く、お風呂でも火のつくように泣く。こちらもびっくりですけれども、本当に何日間かは近寄ることができませんでした。安心していいんだよ、ここがおうちなんだよということを身をもって教えていくのに、とても時間がかかる子でした。

幼稚園でも根気強く、すばらしい取り組みをしてくださいまして、年長になった春ぐらいから急に自分を出せるようになってきて、めきめきと成長してきました。

里親家庭というのは、決して自分の家庭だけでうまくいけばいいというものではありません。まず地域の人たち、学校や幼稚園、ほかの里親さんたちとの連携や、自立して就職していく時の社会的な機関など、いろいろなところがうまく動いて初めて、里親家庭で育つということがうまくいくということです。周りの社会が理解を深めていただいて、これが当たり前のことなんだという日本の社会になっていけば、子どもたちはさらに居心地がよくなって、家庭で無理なく育てることができるのではないかなと思っています。

その点では、私どもの家庭は長くやってきたことで、その頃からの人たちが今は我が家のよき理解者になってくださるので、最初の里子が果たしてきた役割というのは大きかったのではないかなと思っています。

それから、ここに娘がおりますが、家族の中で娘たちが果たしてきた役割、犠牲になってきた分もあるかもしれませんけれども、果たしてきた役割も大きかった。私たちはいつも家族が支えになって、冠婚葬祭や病気など、家庭にとって大変なときも当然一緒にいるという、そういう体験が彼らにとっては本当に大きな財産になっていくのではないかなと思っております。これから、あと何年この生活ができるかどうかはわかりませんが、私たちの家庭の周りにたくさんのサポーターがいてくれるということは心強いことだなとしみじみと思っています。

【実子】

よく、実家が里親をしているという話をすると、「里親って養子縁組じゃないの？」といわれます。実の子どもがいながら母のように里親をしている家庭もあることを結構知らない方がとても多いのです。

私が小学校１年生の８月１日、この日は忘れられないです。その日に軽度の知的障害を持っている１歳違いの弟がうちに来たことが､我が家の里親生活の始まりでした。次の里子が来たのが、私が高校３年生になった頃だったので、それまで姉と私と弟の３人兄弟の時期がとても長かったことになります。彼との生活は思い出すといろいろあり過ぎて、大変だったという言葉が一番最初に来る言葉ではないかと思います。なぜなら、彼が私の大切なぬいぐるみをはさみで切ったり、いろいろな問題行動がとても多い子だったのです。それに１歳違いということで、私は弟のことを受け入れられませんでした。

心のどこかで何でこんな辛い思いをしてまで里親を続けなきゃいけないのかという不満もすごく多かったのですが､両親が一生懸命､子どもたちを育てている姿を見て、私はどうしてもやめてほしいとは言えませんでした。辛いことの方が多かったかもしれないのですが、結婚して家を離れてみて、やっと母のやってきたこと、自分が生きてきたことが、なくてはならないことだった、自分に与えられた使命だったと今は思います。私が高校３年生のときに、２人目、３人目の里子がきて、日に日に笑顔が多くなってくるのをみて、こういうことが里親の意味なんだというのを教えてもらった気がします。最近は、私がこの家に生まれて本当に良かったというふうに言えるようになりましたが、実子の立場や気持ちにも配慮し、是非実子にも目をむけ、折りにふれて話を聞いてもらう機会を作って欲しいということを皆さんにお願いしたいです。

６　私の大事な宝物

【里母】

私は５人兄弟の末っ子で、実家の跡継ぎがいないため、当時18歳の次男を養子に出しました。高校卒業まで私が育てたのですが、それからは夕方になると、帰ってこない息子を思い出し、何にも手がつかず、涙があふれてくるのです。養子に出して２か月が過ぎた頃、広報を読んでいた時に里親募集の記事が目に飛び込んできました。「そうだ、これだ。私はもうひとり子どもを育てればいいんだ。」と強く思いました。早速主人に相談したところ、「君が育てる自信があるならいいよ。」と快く承諾してくれました。

東京都の審査が通り、認定証が発行された日に連絡があって、「２歳３か月の女の子がいます、どうでしょうか。」とお話がありました。実子は２人とも男の子だったので、女の子を希望していたのですが、「もうおむつも取れて手がかからない、４歳か５歳ぐらいの大きい子がいいな」と思っていました。そしたら里親仲間が「何言っているのよ、小さければ小さいほど育てやすいからいいんじゃないの。」と後押しをしてくれました。「じゃあ、それならやってみようかな。」って、最初はそんな動機だったんです。女の子はＤちゃんといいます。Ｄちゃんは生後１週間で乳児院に預けられたので、「ママ」と呼ぶのは私が初めてでした。何だか私が里親になるのを待っていたかのように感じました。

Ｄちゃんが３歳になった日、私はＤちゃんに「あのね、今日はＤちゃんのお誕生日なの。Ｄちゃんがおめでとうなんだけど、産んでくれたお母さんに『ありがとう』とお礼を言う日でもあるんだよ。みんなはお母さんが１人しかいないけど、Ｄちゃんにはこのママと産んでくれたママと２人のママがいるの。うちのお兄ちゃんも、私が産んで、駒込のママが育てているでしょう。同じだね」と話したところ、「ふうん。私にはママが２人いるんだ」って納得してくれました。「Ｄちゃん、ママと一緒に『産んでくれたママ、ありがとう』って言おうね。」と３歳のＤちゃんに告知をいたしました。しばらくたってから「ママ、どうして私を産んでくれなかったの。」と聞かれて、一瞬どうしようかなと思いましたが、「あのね、ママはね、ずっとお仕事していたから、神様にお願いして、どうかかわいい女の子をくださいってお祈りしていたの。そしたら神様がＤちゃんに会わせてくれたんだよ」と言いました。そうしたら「なぜもっと早くお迎えに来てくれなかったの？」と言われ、「ごめんね、ママね、お仕事が忙しくてなかなかお迎えに行かれなかったの。でも、もうずっと一緒にいようね。」と話しました。

また、息子たちにはなかったのですが、Ｄちゃんは毎日「ママ、私のことどれくらい

好き？」と聞いてきます。最初は手を広げて「これくらい好きかな。」、次の日は「このおうちぐらい好きかな」って、言うたびにぎゅって抱きしめてあげました。そのうち「日本一好き？」「世界で一番好き？」「この宇宙全体ぐらい好き？」って聞いてきました。それで毎日毎日「だいだい大好き、もう私の宝物ちゃん、起きといで。」とか、人が聞いたらくすぐったくなるようなことをわざと言っていました。それが絆を深めていったように感じます。

私は長年体操の指導をしていて、Ｄちゃんが２歳７か月で正式に我が家に来てからはいつも仕事場へ連れて行くので、自然に体操するようになりました。Ｄちゃんはとても体が柔らかく、足にバネがあってリズム感もよいものを持っています。それで本格的に体操を始めましたが、小学校４年生になった頃体操教室へ行く途中にいなくなってしまいました。警察に届けを出し、夜になって保護されました。Ｄちゃんは「ママに会いたい、でも体操しない私はいらないのかな。本当のママだったら、こんな辛い体操はさせないだろう。」と言っていました。私は「そんなに体操がしたくないなら、もうやらなくてもいいよ。」って言いました。その頃の私は「体操をやらせて、それで何とか一人前にしたい。」って思っていましたから、「そんなに体操がしたくないなら、もうやらなくていいよ。しばらく体操は休もうね。でもママはね、Ｄちゃんが大きくなってママの体操教室を継いでくれると嬉しいんだけど。」と言いました。それから10日間ほど体操を休み、いろいろ話した結果、練習を再開することになりました。Ｄちゃんの夢は「オリンピックに出てママの体操教室の先生になること。」だそうです。

中学生になって更に練習が厳しくなり、かかとの疲労骨折で大手術をしました。約１年間、ケガとの戦いでした。やっと試合に復帰できた時「ママ、私あのとき体操やめなくてよかった。」と言ってくれました。「そうだね、やめないでよかったね。やめるのは簡単だけど、続けることが難しいの。大学にいって先生の資格取ろうね。」と言ったら、「ケガした時は、もう体操ができなくなるかなって落ち込んだけど、私、絶対にオリンピックに出るよ。」と明るく言うのです。

私は、この子が一人立ちして社会に出るとき、何か一つ自信を持ってできることを身につけさせてあげたいと思って体操を続けてきました。しかし治療中は体操ができないイライラで、きつい言葉をいっぱい言われたりして子育てに自信がなくなり、「もう無理かな、あきらめようかな。」と思ったこともありました。でも、もし自分の子だったら、「もう、子育てやめた。」と簡単にさじを投げることなどできないはず。あきらめてはだめだと思い直すのです。私たちよりずっとＤちゃんの方が辛く、悲しく、どうしてよいのかわからずに私たちに当たり散らし、わがまま放題しているのがよくわかります。でも遠慮なくそんなことができるくらい、12年間が深い絆になってもいるんだなって感じています。だって、Ｄちゃんは私の大事な宝物。どんなにか、Ｄちゃんから幸せをもらっていることかわかりません。

７　自立をめざして

【里母】

私の家にいる女の子は 18 歳、高校３年生になりました。私たち夫婦は、犬が１匹、猫が５匹、オカメインコが１羽いる、大家族で生活しています。主人は大学の先生をしています。私は、この 20 年ぐらい家で翻訳をしているので、時間的に子育てができるわけです。子どもとは、高校１年生から一緒に暮らしています。

そのいきさつは、彼女が小学４年生のときにお母さんが入院して、施設に入ることになり、そして縁あってうちに遊びに来るようになりました。東京都に勤めている友人から、「犬や猫もいい、外国の子供もいい、でももっと近くに目を移してごらん。日本だって、東京だって、親元で過ごせない子がたくさんいるから。そういう子たちにも手を差し伸べてくれないかな。」と言われて、それですぐに東京都に連絡したら、養育家庭センターからフレンドホーム制度を紹介されました。学校の休みに子どもを預かり、家庭体験をさせる制度だと説明されました。「どんな子がいいですか？」と聞かれ、小学生・女の子・あんまり騒がしくない子・犬猫が嫌いでなく猫アレルギーがない子という４点を言いましたら、すぐに紹介されました。フレンドホームとして小学４年から中学３年まで６年間、そして本人が中学２年ぐらいの時に私どもの家から高校に通いたいという希望を本人が持ち、それで高校から預かることになりました。難しい年頃にはなるし、育ち盛りの子の食生活などうまくフォローできるかいろいろ悩みましたが、こんなにうまく交流が続いていたのに、ここでノーと言って、もしもグレたら大変だという気持ちや、高校に進んでから家に来なくなってしまうのはとても寂しいことだったので決めました。ただし今まではお客様だったけどこれからは家族なのよ、そう言って受け入れました。

いよいよこの子が高校３年生になって、大学進学に向けていろいろと準備をしています。また、東京都から自立のための支度金が出たり、それ以外にも入学金を肩代わりしてくれる財団がありますので、それらの申請準備もしています。施設にいた頃は、大学に進学するなんて思いもよらなかったそうです。真面目な子なので環境が整い、勉強って楽しいということがわかったようです。大学は自宅から通えて、推薦でと考えていました。だけど、５月に突然「私は地方の大学に行きます。」と言われ、とてもショックで初めは反対しました。いろいろ話し合い、自分でも考え、友達の意見も聞き、この年頃で決心したことをやめさせていいはずがないと判断しました。何で地方なのかが疑問でしたけど、東京近郊の大学は一般入試で入るのは難しいからということのようでした。高校に入ったときは最下位ぐらいで赤点の心配をしていたのが、徐々に成績が上がって２年生の中ごろにはいつも 30 番以内に入っていました。学力テストの成績は良くないものの、真面目ですから試験範囲がきちっとある定期試験では

とてもいい成績がとれますので、大学からの受け入れ人数が決まる指定校推薦を考えていました。ただ学校内で希望者が複数いると、成績のいい方が推薦されるだろうと話していたら、彼女が自分の学校から余り行かない大学を調べ、それがある地方の大学だったのです。そして内申書の成績もクリアし、その大学への推薦をいただきました。

彼女は高校に入った頃から社会科の先生になりたいと言っていました。自分は皆に助けてもらってうまくいったけれども、施設にいる時に、やけになったり悪い方に走ったりという子も見てきたそうです。希望を持って、自分の信念を持っていればかなえられるということを子どもたちに教えてあげたいから先生になりたいそうです。地方に行くのも、今までの守られていた生活から自立して、一人で生活するということはどういうことか体験しようと、しっかりとした考えをもって決めたようです。

本当にこの子で私は良かったと思います。いい子だし、もともといい素質を持っていたと思います。だけど、大きな欠点がないから小さいことが気になりました。「ありがとう」という言葉をあまり言わないんです。あるときに「何でありがとうって言わないの。」って聞いたら、「モンゴルではありがとうって言わないんだよ。心の中でありがとうっていう気持ちを持っていれば、言葉に出す必要ないんだよ。」って答えました。「でも、ここは日本なんだよ。やっぱり誰かに何かやってもらったり、嬉しいと思ったときは言おうね。」って伝えてから、少しずつ言うようにはなっていますが、今もなかなか出ません。ありがとうっていう言葉を自覚していないようです。

最後に、細かい波風はありましたが、全体としていい子育てができたと思います。私も幸せを一杯もらったし、来年の４月には晴れて希望通りの大学生になると思います。彼女にはちょっとレベルの高い大学のようですが、真面目に勉強してアルバイトもそこそこやって、いい学生生活が送れると思います。多分私は、夏休みに帰ってくるのをとても楽しみにして、わくわくするんじゃないかと思います。

８　お母さんから生まれたかった

【里母】

私の家族は、主人と私、中１の実子の娘と小３の里子のＥちゃんの４人家族です。

私は、独身の頃、神奈川県内の養護施設に勤めていました。施設は集団生活ですから、ルールがあり、制約もあり、毎日決まった日課を過ごしていました。

買い物とか、外出だとか、そういう機会も経験も少なくて、ある子どもに今特別に愛情かけたり、時間を割くことが必要であっても、それは他の子と平等ではなくなるので、個人にはよかれと思ってもなかなかできない養護が多かったように思います。

ゆえに私は、施設に勤めながら、いつか里親をしたいなと漠然と思っていました。

そして、娘が小学校１年生の時、２歳４か月の女の子を紹介されました。家族３人と児童相談所の方とで乳児院を訪ねました。職員の方から、言葉が少し遅れていること、とても警戒心が強いので、子どもと目を合わせないように、顔も余り見ないように、と事前に言われました。

Ｃちゃんは、保母さんに抱かれて面会室に入ってきました。やはり、こちらを見ようともしませんでした。娘と２人で、次に行ったときは、泣きっぱなしという状態でした。警戒心が強く、なかなか私や娘になつこうとしませんでしたが、それでも何回か面会をしているうちに、乳児院の周りを散歩したり、家まで連れてきて２時間ほど過ごしてまた送って行くということをしながら、その後、我が家へ一泊することになりました。この時は、乳児院の習慣で夜７時頃に寝付かせようとしたのですが、こんなところで寝てはたまるもんかとばかりに泣き出し、４時間くらい泣き、泣き疲れて寝てしまいました。本当にかわいそうでした。彼女にしてみたら、納得して私のところに来ている訳ではなし、とても不安だったと思います。それからも１泊の外泊等を重ね、およそ１か月後に、Ｅちゃんは我が家へきました。

この頃には、大人への警戒心は全くなくなっていて、どこの誰にでもついていくし、誰の膝の上でも座ってしまうし、誰にでも甘えられて、眠くなった時とトイレに行きたい時だけ私のところに戻ってくるたくましい子になっていました。

あまりにもかわいく、苦労もなく育ててきたので、真実告知をしなければいけない時が来るのがすごく恐かったです。本人は、私から生まれたと思い込んでいるから「お母さん、お母さん。」と言ってくれているのだろうと思うと、本当のことを知ったらどうなるかなと、とても不安でした。

今度は言おう、早く言おうと焦っていたんですけれども、ある夜、主人と娘がお風呂に入っている時に、Ｅちゃんを膝の上にのせて、「お母さんは、Ｅちゃんに嘘をついていたの、ごめんね。」と話し出しました。「Ｅちゃんはお母さんから産まれたん

じゃなくて、Ｅちゃんのお母さんから産まれたんだけど、Ｅちゃんのお母さんは育てることができなくて赤ちゃんがたくさんいるところに預けたんだよ。それでお母さんは、Ｅちゃんというかわいい子がいるって聞いて、お姉ちゃんとお父さんと一緒に会いに行って、それでうちに連れてきたんだよ。どうしてもうちの子になってもらいたかったからね。」というふうに話しました。

Ｅちゃんは一言も言わずにずっと聞いていました。そして、何事もなかったように、私と一緒にお風呂に入っていつものようにお話をしながら寝ました。

それから１か月くらい後に、「お母さん、お姉ちゃんは誰から産まれたの？」と言われました。「ごめんね、お姉ちゃんはお母さんから産まれたんだ。」と言ったら、「私もお母さんから産まれたかった。」と言われたので、「私も産みたかった。」と言いました。そんなふうに、時々お母さんに関することを質問されます。

私は、人間どうし態度でわかってもらおうと思ってもなかなか伝わらないだろうと思って、とにかく血のつながらない親子ですから親子になる努力はしています。いつも、１日に何回もＥちゃんに「大好き」って伝えています。

次に、実子のことについて少し話します。上の娘は、消極的で恥ずかしがり屋ですが、とても優しい子です。初めの１年は、何でもＥちゃんに譲ってよく面倒見てくれました。私に抱かれているＥちゃんをいつも嬉しそうに見上げていました。しかし、妹が欲しかったとはいえ、それまで母を独占していたのにＥちゃんと半分ずつになってしまった現実は、子どもの想像を超えていたのでしょう。Ｅちゃんが来て１年たった頃から、私にひどく反抗し始めました。それでも「妹なんかいらない」とは一度も言いませんでした。２年くらいそんなふうで、私の悩みは里子よりもいつも実子でした。

一方、Ｅちゃんは歌もダンスも大好きで、いつも鼻歌を歌っています。一輪車と水泳は、見ている方がもうやめたらと声をかけたくなるくらいがむしゃらに練習をして上手になりました。私のしつけが悪いせいか、整理整頓や勉強はちょっと苦手です。でも、お友達には人気があって、プレゼント、手紙、お土産をよくもらってきます。学校から帰ってくるとランドセルを投げて遊びに行ってしまい、家では宿題をやっとやるくらいです。でも今は、お友達と楽しく遊べて学校が楽しければそれでいいかなと思っています。

とにかく一緒にいて楽しいです。この笑顔のまま成長して、幸せをつかんでほしいと思っています。

９　子どもの笑顔が元気の源

【里父】

私は約２年半前に養育家庭に登録しました。家族は、私と妻、子どもが男、男、女、男の４人おります。登録当時は、次男と長女はそれぞれ結婚して独立しており、三男は他県に住んでいたので、家には、私と妻と長男で住んでいました。しかし、長男も家業を継ぐためほとんど家にいない状態でした。４人の子どもたちが独立等で家を出た状況の中、家内が「子どもを４人育てている時、みんなに助けられて育てていくことができた。そして、今度は恩返しと言うか、お礼と言うか、何かしたい。」ということで養育家庭を希望しました。私の両親は、20 数年前、私が 35 歳か 36 歳の時に亡くなったのですが、その時、私たちには子どもが４人いて、そういう中で周りの人たちに色々と助けられながら子育てをやってきたわけです。特に、一番下の子どもが産まれたばかりの頃は、随分周りの人たちにお世話になったと思います。そういう意味合いも込めて、少しでも社会に還元という程大げさではありませんけれども、何かできることを、という意味で登録させてもらいました。でも実際のところ登録までは時間がかかりました。情報不足でもあり、踏ん切りがつかない時期もありましたが、仲間内で 10 年前から養育家庭をしている家庭があり､里子の様子を見ることができたので、それを見て、できるかなと踏ん切りがつき、登録させてもらいました。

登録した当時の里子の希望年齢は、０歳から３歳でしたが、なかなか児童相談所から連絡がこなかったので、３歳から 18 歳と希望年齢を変更しました。そして、最初に紹介されたのは、中１の男の子と小４の女の子の兄妹でした。まず面会ということで２人に会いました。お兄ちゃんは、妹をかばっている様子で、何があっても「大丈夫です、大丈夫です。」と言って、一生懸命頑張っているようでした。下の子は、下を向いたままで返事もほとんどありませんでした。我が家に来た日の夕方、荷物の片付けなどをしたあと、児相の先生が「これで帰るね。」と言ったら、下の子は泣きべそになり「先生と一緒に帰る。」と言い始めました。その後、先生と夜の９時頃まで話し、やっと納得したのか、その場はおさまりました。それが最初の日でした。そして、１か月くらいしてやっと、自分の思いを少しずつですが、話してくれるようになりました。新しい学校では友達もでき、家にも連れてくるようになりました。子どもどうしではよくしゃべり、日が暮れるまで遊んでいて社交的な子どもでした。

里子が来てしばらくすると、長男の嫁が出産で家に来て、約１か月半、一緒に過ごしたのですが、２人にとってとてもいい影響を与えたようです。今まで夕飯が終わると部屋に行ってパソコンをしていた子どもたちも、それからはテレビを一緒にみたりして、随分話をするようになりました。その子どもたちは実親と交流を開始し、受託は８か月あまりで終了となりました。今でも学校の側を通ると、授業参観等に行って

いたことを、懐かしく感じます。

　その後、中３の男の子を紹介されました。高校も決まっており、卒業するまでの約３か月間の預かりでした。とても人懐っこくて、小さい子の扱いに非常に慣れていました。偶然ですが、今度は長女が３番目の子どもを産むので、上の２人の子どもを連れて実家に戻ってきており、彼が学校から帰ってくると、孫たちがその子の取り合いをするように一緒に遊んでいました。逆に、子守をしてくれて助かった面もありました。たった３か月ではありましたが、中身が濃く本当に自分の子どもが１人増えた感じでお世話させていただくことができました。彼は今でも家に遊びに来ます。今まで３回遊びに来ましたが、３回目は「ただいま。」と言って、自分の家みたいに帰ってきてくれました。

　２年半の間に３人の子どもたちを、小さい子を大きくなるまで育てるというような長期ではなくて､本当に短い期間のお預かりで､大した苦労もないような感じですが、今まで３人の子どもを預からせていただきました。何が良かったかというと、心の成長をする時期に子どもたちが笑顔でいるのが、私たちにとって、すごく嬉しかったことです。子どもたちが笑顔を見せてくれると、本当にやっていて良かったなと思います。そして何よりも、子どもと私たちがかかわることで、子どもから元気をもらうことができます。子どもたちが一生懸命遊んでいる、子どもたちが何か一生懸命やっている、それを見て私たちも何かできるんだ、またこれからやろうという元気、子どもたちを見ているだけでこっちもやる気が起き、毎日に張りがあり、楽しみが出てきます。本当に嬉しく思います。逆に子どもたちに感謝するときがあります。

　私と家内が養育家庭をしているのを見て、自分の子どもたちも少しでも社会に還元といいますか、少しでも自分たちにできることをやってもらえれば嬉しいと思っています。

１０　兄弟が２人から３人に

【里母】

今日、この養育家庭の啓発ビデオを初めて見て、すごく立派な人がいっぱい出ていて驚きました。私のような普通の家庭でも、里親をやれるということをわかっていただけたらと思います。

45 歳の夫と私、小学校４年生の長男、小学校２年生の次男と幼稚園年長で５歳の里子の５人家族です。隣には私の父と弟が住んでいます。

里子を預かって１年半くらいになります。里親を希望したのは、次男が小学校にあがって手がかからなくなり、何かしたいと思ったことがきっかけです。今までの子育てで子供たちから教えてもらったことがたくさんありました。何か子どもにかかわることをしたいと思いました。保育士の資格を取ることも考えましたが、里親については前から東京都の広報誌で知っていましたので、やってみようと思い児童相談所へ連絡しました。夫も賛成してくれています。

初めて子どもに会いに施設に行った日は、ひな祭りの日でした。初めの１か月くらいは私ひとりで会いに行き、その後、子どもや夫と一緒に行きました。里子が家に泊まりに来るようになり、５月に正式に家に来ることになりました。

家に同じ年頃の子どももおり、素直な性格の子どもだったことも幸いして、すんなりと家族に馴染んでくれました。犬やウサギなど小動物を飼っていたこともあって、動物を通して子どもと会話がはずみました。気がつくと里子がジッと動物を見ていたりして、動物にも助けられたと思っています。

その頃、里子は「僕も、僕も。」といろいろやりたがりました。生卵を割りたいというのでやらせたら､パーンと握りつぶしてしまい､びっくりした顔をしていました。施設では生卵を割ったことがないのかなと思いました。庭で泥んこ遊びをしながら、笑顔で「泥って楽しいねえ。」と言っていたことを今でも時々思い出します。自然の中で思う存分遊ばせたいと思い、山や川にも連れて行きました。最初はくるぶしの所を流れにつけるだけで泣きべそをかいていました。でも半年くらいたつと、川に入ったら呼んでも上がってこなくなるほど、たくましい子になりました。山登りも、最初はおんぶばかりでしたが、そのうちに自分でしっかり歩けるようになっていました。ほかにも、最初は虫を恐がって、草むらにも入れず何か出てくるかもしれないと、めそめそ泣いていたのが、今では虫網を持たせるといつまでも１人で走り回って遊んでいます。虫が大好きになりました。子どもって本当に環境によって変わるんだ、すごいなあと思いました。

しばらくして､次男が時々嘘をつくようになりました｡｢亀の餌をこぼしたのは誰？｣と聞いても、「僕じゃない。」と言い張り、里子の悪口が聞こえたので「誰が言った

の？」と聞いても「僕じゃない。」と言い張ったりしました。そういうことが結構続きました。そんなに大した嘘ではないのですが、今まで嘘をついたことのない子だったので少し驚いてしまい、どうしてなのかと考えました。次男は長男とは２歳違いですが、体が結構大きいので長男が余りかわいいと思ってくれなかったのと、同じ男の子だったせいもあり、長男に対してライバル意識を持ったようです。力では長男にかなわないので、悔しい思いをしていたようです。そんな中で次男は、「小さい子には優しくするんだ。」「僕はね、幼稚園に新しい子が入ってきたら優しくするんだ。」と毎日のように話していて、里子が来た時もいろいろ教えてあげようと考えていたようです。その気持ちが逆に里子にうるさがられて、一緒に暮らしていると気に食わないことも出てきて、里子に意地悪な気持ちを持ったようです。次男の話を聞いているうちに、自分はよい子だと思いたかったのか、意地悪な気持ちを持ってはいけないと無理に思っていたことがわかってきました。「意地悪な気持ちになってもいいんだよ、いい子だよ。」と次男を受け止めてあげると、だんだん嘘を言わなくなりまた。今では、喧嘩しながらも仲良く遊ぶようになりました。

　それまでは次男が一番小さかったんですが、今ではお兄さん風を吹かしています。この前も里子がパンを焼いていたら、「焼いている間にお皿の用意をするんだよ。」と教えていました。そんなふうに次男もお兄さんになれてよかったと思います。次男にそのことを褒めたら「でも、嫌なこともあるよ。」と言っていました。そんなふうに言えるようになったことも、良かったと思いました。兄弟が２人から３人になったことで、家の中の人間関係も結構変わりました。下の２人が遊んでいるところに、長男がちょっかいを出したり、長男と次男で、里子にちょっと意地悪をしてみたり、次男と里子の喧嘩に長男が「だめじゃないか。」と口を出したり、自分も同じことをしているのに偉そうで、そんなこと言わなくてもと思いますが、子ども同士も人間関係が複雑になったようです。でも３人で頭を寄せ合って一冊の本を見ている時もありますし、里子は長男にからかわれたり嫌なことをされることも時々ありますが、長男がいないと「まだ帰ってこないの？」と私にしつこく聞きにきたりもします。

　次男のことも含め、いろいろなことがありましたが、里子が来てくれて良かったと思っています。家族が皆、それぞれ学ぶことができて、ちょうど良い時に良い子が来てくれました。ずっと一緒にいられたら良いと思っています。

　ここでお話しすることが決まって、何をお話ししようかなと考えながら、いろいろなことを思い出すことができました。今日は、お話しする機会をいただきありがとうございました。

１１　子どもたちに感謝！

【里母】

10 年ほど前、私は職場でケガをして、その日から寝たきりの生活が始まりました。それまでの元気に動き回る生活から一転し、寝て過ごす日々が続きました。自分がそのような状況になるとは思ってもおらず、ただ寝て過ごす生活の中で精神的にも追い詰められていったのです。

そんな時ふと目にした東京都の広報で、里親募集の広告を見ました。仕事をしていたときは新聞以外のチラシなどには目もくれなかったのですが、その日はたまたま新聞を読むついでに東京都の広報を開いていました。

里親募集の広告を目にして、早速、書いてあった問い合せ先へ電話をすると「家族とよく相談してください。」と言われました。まずは３人の実子に相談したら、３人とも快く賛成してくれました。自分に出来るのだろうかという不安も少しあったので、子どもたちの「やったほうがいいよ！」という声に、これで良かったんだ、とほっとしました。

そこへ主人が帰ってきたので里親をやりたいという話をすると、「里親って、簡単にできるのか」と叱られました。その時の私は、言葉も上手く喋れず、歩くのもやっとの状況だったのです。「そんな手のかかるおまえがいるのに、また手のかかる子どもが来るんじゃないか。」というのが主人の意見でした。そんなふうに主人に言われ、やっぱりやめた方がいいのかという気持になりかけた時、３人の子どもたちが「お母さんが決めたことなんだから、やらせてあげなよ。」と言ってくれて、またやる気が沸いてきました。次の日の朝一番で電話して「相談しましたか。」と聞かれ「皆賛成です。」と答えてしまいました。

その後、養育家庭として登録しましたが、１年以上子どもの紹介はありませんでした。自分のこともちゃんとできないのに子どもは育てられないだろうと、皆、私のことをよく見ているんだなと思っていました。

そう思っていた矢先、かわいい女の子がいるという話がありました。「知的障害があるけれど、そういう子どもでもいいですか？」と聞かれました。家族とも相談し、会ってみて無理そうであれば断わればいい、ということになりました。

その子に会うため、主人と２人で施設へ出かけました。矯正眼鏡をしていて、かわいい子どもでした。ただ驚いたのは、６歳半だというのによだれが止まらないということでした。よだれが止まらないというのは大変だと思いながらも交流が進んでいったのです。

一緒に暮らすことになったとき、主人と今後の子育てについて話し合いました。就学前なので、まず、ひらがなを教えることにしました。混乱しないように「あ」から

順番にひらがなを教えました。「あ」を覚えるのに１か月かかり、その時初めて「あ」という文字がとても難しいということに気が付かされました。それでも、なんとか自分の名前も書けるようになりました。

幼稚園は近くの教会の幼稚園へ入れることにしました。幼稚園の園長先生はその子を抱きしめ、受け入れてくれました。園長先生とは、もう少し、あと１年早く出会えたなら基礎的なことを覚えてから学校に入れたのではないかと話しました。

この子は知的障害がありましたが、小学校は普通学級に入学させました。学校から「授業に来てください」と言われたこともあり、国語と算数の授業はできるだけ毎日見に行くようにしました。実子の時は仕事をしていたため、ほとんど放ったらかし状態だったのに、どういうわけか里子になると気になって学校まで覗きに行くことが多くなりました。

この子が小学校４年生の時に、家族で相談してこの子のためにも、もうひとり預かろうと決めました。実子はもう大きかったので、この子とは考え方も行動も違ったからです。紹介された子は次女そっくりの２歳の女の子で、乳児院から我が家に来ました。泣いてばかりいる子で、私から離れず、家事をしている時もずっとおんぶしていました。

すると上の子がすねてしまったのか、学校からなかなか帰宅しなくなってしまいました。どうしたものかと思って話をしようとしても、そういう時は何も答えてくれないのです。現在中学校２年生ですけれども、自分の思いをあまり話しません。私が何か話をして「じゃ、わかったの？」と聞くと「うん、わかった。」と言うけれど、全然分かっていないことが多いです。なんだか私だけが振り回されているように感じることもあります。それでも中学２年生になって少しは成長し、注意することも少なくなってきました。将来は人に迷惑をかけないように、自分で働いて生活してもらいたいとよく言い聞かせています。18 歳になるまであと４年足らずなので、この４年間でどういうふうに育てていけばよいのかを、また考え直さなければいけない時期にきています。

下の子はまだ小学校１年生なので、すくすく育って素敵なお嬢さんになってもらいたいなと思いながら育てさせてもらっています。

この子たちが我が家に来た時、私はこんなふうに話ができませんでした。上の子が来てから、いろいろと障害のことなどを勉強するようになって、このように話ができるようになりました。毎日、子どもたちに感謝しながら生きています。

１２　うちに来て良かったね

【里父】

家は天理教の教会で、家族は両親と私と妻と小学５年の長女と１年生の次女に、いま幼稚園年長組のＦちゃんがきて７人です。Ｆちゃんが家に来て１年７か月になります。７年ほど前、同じ教団のご夫妻が養育家庭として奮闘している記事を読んで感動するとともに、養育家庭という言葉と制度を知ったわけです。その方と直接お話しして自分も一刻も早く里親をやりたいと思いました。すぐに妻に話しをしたところ、次女が産まれてすぐだったため、せめて下の子が３歳になってから考えましょうということになり、次女の３歳の誕生日の前日に登録だけならということで了解してくれました。妻にしてみれば一大決心だったと思うんです。私の実家は７人兄弟で、ほかにも人の出入りがあって最大 11 人くらいの家族でしたが､妻は両親と３人で暮らしていたわけで、子育てや家族観にずれがあったのは仕方がないと思います。

平成 16 年７月に当時３歳の女の子の話しがあり､乳児院に面会に行くことになりました。初対面の日、私が急に用事ができて行けなくなり、妻と当時４歳の次女の２人で面会に行ってくれました。帰ってからの妻は口が重くて、何か聞いても「気の毒だとは思うんだけれどもね。」と言うだけで、後の言葉が続きません。３週間後に、長女と私も加わって家族４人で面会に行くことになりました。その日は、朝から妻は非常に機嫌が悪かったことを覚えています。

Ｆちゃんは次女の顔を見て安心したようで、初対面の長女にも自分から手をつないで３人で仲よく遊戯室のほうに遊びにいき、居合わせた児相センターや乳児院の関係者の方々もそういう様子を見て、「すっかり打ち解けていますね。やっぱり、子どもは子どもどうしですね。」と、口々にこの組み合わせが良い雰囲気であると強調されているように感じました。反対に、妻は口数がだんだん減り、下を向いていて、ついに泣き出してしまいました。もう一度夫婦で話し合わなければと思った時、登録の時からずっと担当していた養育家庭専門員さんが静かな口調で、「私、奥さんの気持ちよく理解できます。ただ、施設しか知らないあの子にとって、今、○○さん一家とこうして触れ合っているだけで、今後の人生にどれだけプラスになるか分からないんです。引き取りが実現した際には、実子さん２人にも気を配ってあげてください。あの子のいないときはギュッと抱きしめてください。小さいながら我慢していることを、うんとほめてあげてください。」と言ってくださったんです。それを聞き、胸のつかえがとれ、預かれるというふうに思いました。それが我々夫婦にとって、あと一歩、あと半歩踏み出すのに本当に必要な一言だったんだと思います。その後は月２回ほど面会をし、乳児院近くの公園で遊んだり、お弁当を食べたりして触れ合いを続けました。

出会ってから４か月目に我が家に一泊しました。そのときも心配で、専門員さんに「夜中に泣いたらどうしようかと思っているんですけれども。」と言うと。「子どもは泣きますよ。添い寝をしてくだされば結構だと思いますよ。」とアドバイスをいただきました。７か月後、Ｆちゃんが３歳 11 か月のときにとうとう我が家に来ました。まだおむつがとれず、子ども部屋のある２階の階段の上り下りができませんでした。口数が極端に少ない割に、バンドエイドのことをバンソーコーと言ったり、掃除機の音がすると座布団を持って部屋から出て行ったり、何も言わなければ一日中何もしないでいるような子でした。朝目覚めたときと夕食のときに必ずメソメソし、訳を聞いてもただ泣くばかりでした。だんだんと慣れ、５月ぐらいにおむつがとれたため、６月から幼稚園の年中組に入れましたが、同じ年の子と一緒にいると遅れが非常に目立ちました。しかし幼稚園の先生ともお話しをしていくうちに、それはすべて体験が乏しく、自信がないからだということがだんだん分かってきました。

また、年末に私たちの兄弟が子どもをみんな連れて、ホテルのバイキングで忘年会をしましたが、行く道々でクリスマスのイルミネーションを見て、娘たちはきれいだ、きれいだと指を差して騒いでいるんですが、それに比べて里子のほうは「Ｆちゃん、もっと大きいの見たことあるよ。」と、見ても全然喜ばないんです。逆に、正月におじいちゃんが子どもたち３人にお年玉をくれたときは、「Ｆちゃん、もらったよ。」と１人で興奮してるんですね。その後も、親戚の人や知り合いの方々がお年玉をくれるたびに、「またもらったよ。」、「３つになったよ。」、「４つになったよ。」と言って騒いでいるんです。ポチ袋に「Ｆちゃんへ」と書かれていることを本当に心の底から喜んでいるようなんです。

施設でのイベントというと、職員の方々が飾り付けなどに追われて子どもたちにとってはかまってもらえてないという思いがあるんだと想像できますが、子どもにとってはいつも同じメンバーの温かい家族というのがあってこそ、楽しい年中行事であり、それが心に残るんだと思います。

養育家庭をさせていただいて本当に良かったと思っています。里子を預かってから、自分の今まで気づかなかった欠点がよくわかります。預かってからでないとわからないことも大変多く判明してきました。また、日に日に明るくなっていくＦちゃんを見て、娘たちが「Ｆちゃん、うちに来て良かったね。」と言ってくれています。

１３　頼もしいお兄ちゃん

【里母】

ちょうど今日で４歳９か月になる女の子、Ｇ子を受託して２年になります。

初めてＧ子に会ったのは２年前の６月、目がくりくりっとしたとても愛らしい子でした。主人と２人で会いに行くと、生後８か月で乳児院に預けられたＧ子は、恥ずかしそうなそぶりを見せたものの、人見知りもなく、マイペースで、淡々と遊んでいました。顔を覚えるまで、最低 10 日間は連続して来てくださいと言われて、毎日通いましたが、Ｇ子が待っていてくれると思うと、往復の２時間は苦になりませんでした。ただ、面会に行くと、Ｇ子だけでなくほかの子供たちも寄ってきて、ひざに座ったり、おんぶを迫って離れず、ここにいるすべての子供を連れて帰りたい気持ちになりました。

私たち夫婦には、小学校５年生になる息子がおりますが、２人目がなかなか授からず、それがお互いストレスになっていたとき、東京都の広報紙で養育家庭を知りました。資料を取り寄せ、児童相談所に説明を聞きに行って、養育家庭になろうと決めたのですが、次の行動に移すまでに２、３か月ほど、ひとりで悩んでいました。ある日、思い切って主人に話をしたところ、意外と簡単に「いいんじゃないの。」と返事が返ってきました。そして、息子は小さい時から赤ちゃんが欲しいと望んでいたためか、こちらも簡単に「いいよ。」という返事でした。第１関門を突破した喜びと、もう一度、小さい子を抱きしめられる思いで、一番嬉しかったのは私だった気がします。

最初の頃、Ｇ子と息子の関係は、うまくいきませんでした。小学校３年生まで母親を独占してきた息子は、Ｇ子が私とべったり一日中一緒にいるので、嫉妬心でいっぱいだったようです。Ｇ子が私に近づくだけで目の色を変え、「ママに近づいちゃだめ、あっちに行って。」と、Ｇ子に手や足を出し、あげくの果てに「自分なんかいない方がいいんだ、Ｇ子の方が大事なんだ。」と泣き出す始末。Ｇ子は大粒の涙をこぼして部屋の隅でじっと耐えている状態でした。Ｇ子は、面会時とは全く違う息子の態度に戸惑いながらも、特に赤ちゃんがえりも、試し行動もみせず、状況を受け入れようとして、必死だったような気がします。１年ほどして、徐々にお互いの存在を受け入れられるようになり、２人とも落ちつきを取り戻してきました。

またＧ子は、年齢相応のいたずらも一通りしていました。おもちゃ箱をすべてひっくり返して遊んだり、ＣＤをケースからすべて出して広げたり、また電車やスーパーでひっくり返って泣いて、他のお客さんに罵声を浴びせられたこともありました。パン屋さんに行っても、パンに素手でさわってしまうこともしばしばでした。でも、どんな子供でも、この程度のことは１度は経験するもので、あえて里子だからと気にすることもありませんでした。大抵の行動は気にならず、いつかはしなくなるだろうぐ

らいに考えていました。

反面、息子は学校で友達からＧ子について、「誰？」「どこから来たの？」「名前は何？」「いつまでここにいるの？」と質問攻めにあい、何も答えられず、「Ｇ子を乳児院に帰して。もういらない。」という言葉を言い続けましたが、今では本当の兄弟のようです。主人や私を取り合い、けんかも激しくしますが、何かあるとお互いに助け合う姿に嬉しさを感じています。以前の状況は、良い思い出として受け入れられるようになっています。Ｇ子の実母の体調が回復しているということで、「Ｇ子を実母のもとに帰すことになるかもしれない。」と話した時には、息子は涙を流していました。Ｇ子は、この家の子で、自分の妹になったと思っていたようでした。

今の２人の関係は、私にはとてもほほえましく、かわいいと感じられます。息子は、私が外出するときには、Ｇ子をお風呂に入れ、寝かしつけてくれる本当に頼もしい兄に成長してくれています。Ｇ子も、家では「お兄ちゃんなんか大嫌い、あっちに行って。」と言っているものの、外では「私のお兄ちゃんはとても優しくて大好き。」と、その変わり身の早さには驚かされます。

私たち家族にとって、Ｇ子は本当の家族の一員であり、里子と意識することは全くと言っていいほどありませんが、事実として、Ｇ子の実母のことを２度ほど話しました。私たちのことはパパとママ、実母のことはお母さんと呼んで、Ｇ子はお母さんのお腹から産まれてきたこと、でもパパもママもお兄ちゃんも皆、Ｇ子が大好きで、とても大切であることを説明しました。

一度目の昨年は、まだ何のことかわからず、私の話を受け入れまいと、ものすごく反抗したかと思うと、私から全く離れず、幼稚園にも行きたがらなくなりました。私たち家族、特に私にしがみつこうと必死だったのではないかと考えられます。

しかし、今年はまた違った反応で、「お母さんはどこにいるの、会えるの？」と聞いてきて、１年の成長はすごいなと感じさせられたと同時に、何ともいえない寂しさを味わいました。いつか本当に実母に会う日が来るのだと思うと、とても複雑な気持ちですが、我々家族にとって、Ｇ子がかけがえのない存在であるように、Ｇ子にとっても我々家族がかけがえのない存在であってほしいと願います。

Ｇ子は、これまで病気らしい病気もせず、息子と比べると本当に手を煩わせることなく過ごしてきましたが、それがかえっていじらしくも感じています。これまで、Ｇ子を通してたくさんの人々に出会えたことに感謝して、これから先もＧ子の成長をずっと見守っていきたいと思っています。

１４　どうしてお母さん、いてくれないの？

【里母】

現在、我が家は中学２年生、小学校３年生、幼稚園年長の男の子ばかりの実子３人と、3歳になる女の里子１人の６人家族です。平成16年３月に養育家庭の認定を受け、翌年、我が家に１歳11か月のＨちゃんの話が来ました。Ｈちゃんのいる乳児院へ２、３日おきに会いに行くこと20数回。春から我が家への委託が決まり、６人での生活がスタートしました。家庭での生活が全く初めてのＨちゃんは、日々緊張していた様子で、いつも眉間にしわを寄せて、まるでおびえる子ザルのようでした。また、最初の頃は家の中のいろいろなものに興味を示し、ティッシュ箱からティッシュを全部出してしまったり、ポンプ式の洗剤を使うのが面白くて、なくなるまで何度でも繰り返し手洗いをする。買い物へ行けばお気に入りのお菓子の袋をその場で開封してしまったりと、本当に目が離せない日々でした。そのたびに、「これはこうして使うんだよ。」と説明する私に対して、Ｈちゃんが納得できないと、きつい目つきで、「やだ」「だめ」と言ってくるのです。「２歳の子ってこんなに鋭い目つきするんだっけ？」とびっくりしました。そんな様子を身近に見ていた実子は、「Ｈなんか、乳児院へ帰れ。」と怒鳴ることもあり、養育家庭を行うことが良かったのだろうかと自問自答することもありました。そんなとき実子に対して、「自分がどこかへ行っちゃえって言われたら悲しい気持ちになるよね、もうそんなこと言わないでね。」と説得しました。それ以降は言わなくなり、本当に実子がいとおしく思えてなりませんでした。

Ｈちゃんと初めてお風呂へ入った時、大人の裸を見たことがなかったせいか、とてもびっくりしていました。慣れてくると、おっぱいを触ったり、吸ったりして、「おかあたんのおっぱいね。」と、嬉しそうな姿を見せていました。Ｈちゃんは、日々の家庭での暮らしについて、目で見て、触れて、においを嗅いで、口で触れてと、体で覚えていきながら、赤ちゃん時代にできなかった経験をやり尽くしているんだなと、痛感しました。そんな様子に一番敏感だったのが三男でした。年中さんでしたが、赤ちゃんがえりをしたのです。幼稚園の園長先生や保育士さん、同じクラスの保護者の方たちには養育家庭のこと、Ｈちゃんを預かっていることなどを伝えておいたので、すんなり受け入れられてもらえました。園長先生からは、「春頃から急に情緒不安定な様子だったので、里親をするのはやめたらって言おうかと思っていたけれど、５月頃から生活態度が落ちついてきたので、お家の中も落ちついてきたのかしらって思っていたのよ。」とおっしゃいました。確かに三男は、Ｈちゃんがある程度落ちつき始めた頃から落ちつきを取り戻していったので、私の中でも一区切りついた時期になりました。そして、今年の春より、Ｈちゃんは三男と同じ幼稚園に入園しました。三男のクラスのママたちから、「Ｈちゃん、１年前と違ってすごくいい表情になったね。」

と、変化していく姿を話してもらうたびに、この１年間でのＨちゃんの成長は、目を見張るものだったんだなと実感しました。

　さて、受託の頃に話を戻しますが、実は養育家庭をすることに義理の父だけは反対していました。主人の実家へ遊びに行っても、義理の父は、Ｈちゃんとは絶対に目を合わせないで避けるような行動をとる状態でした。ところが、義理の父の気持ちとは裏腹に、実子３人がＨちゃんと、物の取り合いから始まって、仲よく分かち合っていく姿や、一緒にだんご状態で遊んでいる姿などを見ていて、少しずつ変わり始めてくれたのです。お彼岸に、主人の実家で義理の母とおはぎをつくっているときのお話です。実子が先に近くの公園へ遊びに行ってしまい、Ｈちゃんが取り残され、だだをこねていました。少し離れたところにいた義理の父が、小さな座布団を自転車の後ろに置いて、Ｈちゃんをその座布団に乗せてくれたのです。「こんな小さくたって、自分がどう思われているか、人をちゃんと見分けているんだよな、この子には何にも罪はない。」と、ひとり言のようにつぶやいて出かけていったのでした。本当に嬉しい出来事でした。

　Ｈちゃんは、乳児院からいただいてきたアルバムを見ては、「どうしてお母さん、いてくれないの？」と怒ります。そんな時は、「Ｈちゃんは、赤ちゃんのお友達と頑張っていたんだよね、偉かったね！」とほめてあげます。すると、「そうなんだよ、Ｈはすごーく寂しかったんだよ、ひとりぼっちで。」と言ってきたのです。そんな言葉を聞いた時は胸が詰まります。Ｈちゃんがもう少しお姉ちゃんになったら、状況を少しずつ話していくつもりです。「お父さんは強くて、お母さんは優しいんだよね」と、先日もそんなことを言ってくれました。最初は、女の子も育てたいと思って里親になったのですが、今現在、男も女も関係なく、子育てすることには変わりがないことを知りました。

１５　44 歳秋、新たな暮らしが始まりました

【里母】

里親になろうと思ったのは、40 歳を過ぎて子どもがいなかったこと、主人も私も子どもが好きだったこともあり、ネットなどで情報収集し、２～３年の間夫婦で何度も話をしているうちに、いつしか心を固めていました。

うちは夫婦共稼ぎです。比較的時間の都合はつくのですが、40 歳過ぎまで慌しく仕事をしてきた私は、ぼちぼち別の生き方を考えていました。不安だったのは、お昼ぐらいから仕事が始まって、９時、10 時、午前様まで酒を飲んでいるような無茶苦茶な生活のリズムでした。

そんな私が子育てを始めてから、何の苦労もなく早起きになりました。子ども中心の生活になりましたが、苦労とは余り思わなくて、本当に 10 時ぐらいに毎日寝ています。40 歳を過ぎて子育て経験がなくて、子どもがいたらいいなと思っている方がいらしたら、ぜひ里親になることを宣伝して回りたいなと思っています。何しろ、私にできるんですから。

さて、里親に認定されて、実際に子どもの委託があるまで、１年半ぐらいだったですね。その期間中に大体、月に１回２時間ぐらいですが、里親の人たちが集まって、いろいろなお話をする会に参加し、とても勉強になりました。キャリアのある里親さんは、肩の力がとても抜けています。いろいろな問題がある子どもを育ててきているというのもありますが、どんと構えていて、とても安心できました。子どもはいろいろな問題を抱えているし、親にも育てられない事情を抱えているんですから。その子どもの様子を受け身で見ていられる余裕を、里親さんのお人柄から見せていただいて実際､自分で子どもを預かって育て始める時に､気分的にとっても支えになりました。

そうこうするうちに、話をいただきました。私がちょうど乳がんの手術を２か月後に控えている時でした。後で考えると無謀とも言えますが、なぜかできるような気がして、夫には私のわがままを通させてもらいました。

１歳半の子どもの写真を見た時は、かわいいなと思いました。施設に行くと、私のところにもお座りしてくれますが、一通り大人の膝をずっと回ると、担当の保母さんのところに落ちつくんですね。これを目の前で見せられると辛いものがあります。でも、そのときに施設の担当者が、何も言わなくても私のちょっとした顔色を見て「お母さんとはなんか相性がいいみたい。」とフォローしてくださり、本当に上手にサポートしてくださいました。

最初の２週間ぐらいは、ほぼ毎日施設に通いました。そこまでしなくてもいいと施設の方からも言われましたが、不思議なことに、毎朝８時には家を出ました。起きられたんです。「坊やがにっこり笑ってくれる、待ってくれている。」と思うと、なん

か本当にデートに行くような気持ちで、いやデートの時もそんなにいそいそと出かけなかったのにと思うくらい、大変だけれども楽しい期間でもありました。私は子育て経験がなかったので、施設で教えてもらうことが多かったです。坊やも抱かれ方が下手だし、私も抱き方が下手だったので、とても腕が痛くなりました。でも疲れてくると力が抜けて、抱き方、抱かれ方が自然になっていくのですね。施設通いを通じて母親の訓練をさせてもらいました。

もう一つは、施設で育っている子どもの事情というのを、とても丁寧に説明してもらいました。施設での暮らし方を知っていることは、引き受ける場合には、結構大事なことです。家庭のお風呂って施設のお風呂に比べて、小さくてちょっと深いので、怖かったみたいです。また、施設等のトイレは開放的で、子ども用の小さい便座があって、扉なんか閉めていないですから、個室のトイレというのも知らない。そういうのを見ていると、「ああ怖いのね、ではいいや、次の機会にしましょう。」というふうにできたのかなと思います。

子どもの豊かな感情は、人に甘えることでき、人を甘えさせる力もできると思うんです。坊やはちょっとずつ獲得していきました。毎晩添い寝をして、子守唄を歌ってやっているうちに、スキンシップは気持ちがいいものと体でわかってきて、甘え方を習得していきました。生まれた時からお母さんに抱っこされて育った子どもだったら普通にできることもできないんです。なので、できないということをこちらが認識していることが、結構大事です。育つ環境によって、子どもの反応が違うということがわかり、後でとても役立ちました。

保育園では、子どものちょっとした表情、お母さんの言葉づかいなどを、プロの視点でアドバイスしてくれることが、本当に助かりました。

今、坊やは３歳ですが、おうちの中の顔と、保育園に行ったときの頑張った顔というのを既に持っているんですね。保育園でよい子でいられるのは家での安心感があるからで、そういう安らぎの場所をつくっていくことが大事ではないかと思います。

施設にいる子どもの実親のなかには、養育家庭には出したくないという方がいます。養育家庭に、子どもを渡してしまうという感覚があるからです。私たち養育家庭は、実親に対する気持ちの持ち方が課題であると同時に、実親がそういう感情を持っていることも尊重しながら、子どもを、里親と実親の都合で振り回さないように、子ども優先に考えていきたいなと思っています。

１６　里母への『韓国語の応援歌』

【里母】

皆様こんにちは。私の家族を紹介します。夫と中学３年生の男の子、中学１年と、小学５年の女の子の３人の実子がいます。そして、去年６月からうちに来た４歳の男の子と６人でにぎやかな生活を毎日過ごしています。

私たちは 16 年前に結婚して日本に来て､今は多摩市でキリスト教会をしている牧師夫婦です。２年前でしょうか、日本で永住権をもらったので、今度は私たちが日本のために何かしてみようかと主人と相談したところ、ちょうどそのとき里親をしているある宣教師の話を聞いてとても感動したんですね。それで、とにかく里親をやってみようという気持ちで、２人で申し込みました。私はすごく不安で迷いもあったのですが、夫に従ってやったところ、今は２人ともとても喜んでおります。

まず、児童相談所の先生から、Ｉ君の写真を初めて見せてもらったのですが、とてもかわいい子でした。でも、先生からは、話ができない、よく人をかむとか、引っ込み思案でとても大変な子のような話を聞いていました。

２人で初めて彼に会いに行った時、鼻水を垂らして指をしゃぶりながら、隅っこに一人でいるんですね。それを見て、「うわーっ、とても難しいな。」と心配したのですが、その日はやっぱり彼は何もしゃべらず、指で指して相手に伝えるだけでした。

それでも何回かの面会の後、今度は「ママのおうちに行ってみたい。」と彼が言ってくれたので､「じゃあ､今度は私たちの家で一泊します」と施設の先生に言ったら、「もうすっかり慣れたので、しばらくの間外泊されたらどうですか。」と言われて、私はちょっと戸惑いましたが、「とりあえず、一泊してみてから決めます。」ということで、うちに来たのです。その日の夜、彼がこんなことを言ったんですね。「何でこんなに遅く迎えに来たの。Ｉ君は､ずっとママとパパを待っていたんだよ。」って。

その時は、そんなに上手にしゃべれないと思った子がそこまで言ってくれたので、私たちは本当に耳を疑ったのです。いや、私は 100%この子を自分の子だと思っていないのに、この子は私たちのことをママ、パパと受け入れてくれたんだということを思って、胸が熱くなりました。

その後、いいこともあり、悪いこともいっぱいありました。２か月過ぎると、やっぱりその子なりのものが出てきて、ビデオデッキとか、ＣＤとか、やたら物を壊すんですね。お姉ちゃんたちの部屋にも入ってやっぱり物をいじったり、壊したりしました。皆がちょっと嫌がったりしたので、なるべく大事なものは上に置き、触っていいものは下に置くように工夫すると、彼も今は、これはお姉ちゃんの大事なもの、これはパパの大事なもの、これはママの大事なものとわかってくれて、自分から言ってくれています。

また、Ｉ君はすごく食欲があって、余りにも食べすぎて病院にも何回か行きました。それが心配で、児童相談所の先生にも相談したら、「食べ飽きたら食べなくなるから、大丈夫。」と言われたので「うん、もっと食べて。」というふうに勧めました。今は自分の量を食べたら「ごちそうさま。」と言えるようになりました。

あと、もう一つすごく心配したのは、よく人をかんだりつねったりすることがあって、うちに来ても、私や主人をかんだり、お姉ちゃんたちもかんだりしたことです。これをどういうふうに治せばいいんだろうと思って悩み、一度、私がかまれたときに、私もかんじゃったんです。ぎゅっとかむと、すぐ大泣きするんですね。「痛いでしょう。」と言うと、「痛い。」と泣く。「今まで、君にかまれた皆も痛かったのよ。」と言ったら、その時、初めてわかったみたいで、今はもう完全になくなりました。

それから、人見知りが多くて、余りいい表情では笑わない子だったんです。昔の写真を見ると、笑った写真が余りないのですが、今は笑顔が持ち味のように、本当によく笑って、自分からあいさつをします。

このように、一つひとつ良くなっていったのですが、今度は私がすごく不安になってしまいました。なぜかというと、もっと広い家で、子どもが少ない家のほうが良かったのではないか、この子にとって幸せなのだろうかと、すごく悩み始めたんです。その時の周りの人は、「Ｉ君は本当に変わったよね。笑顔がいいよね」と、私を励ましてくれました。本当に、私が 100%彼のためにやってあげられなくても、私が持っているもので最善を尽くせば、それでいいんだというふうに思えるようになって、私もすごく楽になりました。

この間、私が風邪をひいて、ちょっと疲れてソファーに座っていると、彼が来て「ママ、どうしたの？」と言うから「風邪ひいちゃった。」と言ったら、「あんまり無理しないでね。」と、私の手を握って歌を歌ってくれたんです。うちの夫が韓国語で彼に教えてあげた歌で、内容は「ママ頑張ってね。僕がいるから、ママ頑張ってね。ママ、大好き。」という意味です。それをまず韓国語で歌って、日本語でも歌ってくれたんですね。人を励ましたり、そういうこともできるようになったなと思って、すごく感動しました。

もちろん、自分の子どもではない子を受け入れて育てるのは大変だと思うのですが、それに伴う喜びと、そこから得るものは、本当に言葉に表現できないぐらい多くあると思います。

１７　インタビューに答えて

～シンポジウム形式で行われた２人の養育家庭さんのお話を、質問形式でまとめました～

Ｑ１：最初に養育家庭になった動機を聞かせてください。

養育家庭Ａ（以下、Ａ）　「主人の兄が養育家庭をやっていて勧められたのと、保育士をしていた長女が賛成してくれたのが動機でした。」

養育家庭Ｂ（以下、Ｂ）　「動機を一口で言えば親のいない子がかわいそうだなと思ったことです。施設に勤務していたことがありますが、施設では、子どもが安定して自分の存在感を確認して生活していけるというガードがないんです。子どもが社会に自立していく時のハンデというのは、家庭の中でお母さんやお父さんに抱きしめられて育ってきたか否かは天と地の差がある。その面で親のいない子の育成を考えた時に、かわいそうだなということが大きかったです。」

Ｑ２：受託した子どもたちの状況についてお話しください。

Ａ　「現在、３人の女の子をお預かりしています。高２の子は少し無口で、大人しい感じです。５歳の子は妹思いのおっとりした子ですね。３歳の子は甘えん坊で、いま甘えたい盛りの子どもです。

５歳の子は、２年前に来ました。途中一度、実母さんのもとに帰りましたが、やはり養育ができなくて、また戻って来ました。その時、下の子は、乳児院に入っていたのですが、姉妹を離すのはかわいそうだということで、２人を受託しました。５歳の子は、３歳８か月で来たので、買い物に行くとおもちゃ売り場から絶対離れず座り込んで泣きじゃくるとか、テレビを途中で切ったりすると大泣きをするとか、下の妹は最初は、なかなか信頼関係ができませんでした。だから、うんちやおしっこをしてオムツを替えさせないので、ほめながらオムツを替えさせるという苦労は本当に大変でした。それと、朝の歯みがき、食事の前の手洗い、寝るときの歯みがきなど規律正しい生活ができていない子にそれらを訓練させることの難しさを痛感させられました。まず信頼関係を作ることから始めたいと思い、初めは全てを許しました。おんぶしたり抱っこしたり、危険なこと以外は全部許しました。２、３か月ぐらいたった頃から、やっと私を受け入れてくれました。今は、おしっこもうんちも自分で行けるようにな

って本当に良かったと思っております。信頼関係を築くプロセスは、抱っこやおんぶ、それと一緒に寝てあげて、保育園のことなどいろいろお話をしてスキンシップを図ることでした。」

Ｂ　「我が家の子どもは、愛の手帳４度で乳児院から知的障害児施設を経て我が家に来ました。我が家に来たのは３年生になってすぐでした。施設で育ってきましたので、我慢を重ねてきたと思われまして、最初、子どもでありながら泣けなかったんです。ボランティア帰宅で我が家に来まして、一日中ずっと抱きしめてやりますと、施設に帰るのが苦痛なようでした。子どもは辛いことがあると、泣いて意思を訴えますが、施設の玄関に戻ると苦しくて顔が蒼白になるものの、施設に戻るのはイヤだと訴えて泣くことができなかった子どもでした。靴を下駄箱に入れてから、悲しさと苦しさでどうすることも出来ずに、コンクリートの壁にこんこんと頭をぶつけましたが、それでも泣けない、そういう子でした。施設に戻る時のそんな姿を見るのは、私としてもとても辛いものでしたが、私の辛さなど…大人の苦労など、施設で育った子どもの辛さや、せつなさ、苦労に比べたらどれ程のものかと思い、私も頑張ってボランティア帰宅を続けているうちに、徐々に泣ける様になってきました。

夜はいつも抱いて寝たのですが、夜中に私の顔面でばんばんとすごい大きな音がしたので見ると、子どもが眠ったまま、頭を枕に打ちつけているんです。誰からも手をかけてもらえないとか、声をかけてもらえない子どもに多いのですが、そうしたヘッドバンキングがあり、初めは私も心臓がドキドキする驚きでした。そういう時は、ひたすら抱きしめて一緒に寝ました。

それともう一つ、私はフルタイムで働いていましたので、この子を受託しようと心に決めた時、ひとりで通学ができるように２人で練習をしました。最初はひとりで登校し、次は後をついて登校するというかたちで練習を繰り返しました。最後に校門のところで待っていて、『さあ、今日はひとりで家に帰ってみるよ』と言いましたら、顔を蒼白にして私の腰にしがみついて泣きました。どんなに不安かと胸のつまる思いでしたが、校門前で理由をしっかりと言って聞かせ、「お母さんは働いていくのでひとりで学校の行き帰りができないとお母さんのところには来れないこと」、「後ろを向けば必ずお母さんがいるから大丈夫ということ」をゆっくり、しっかりと言って聞かせました。そうすると、両腕で私のお腹にしがみついていた腕を自ら離し、くるっと振り向いて駅に向かって歩き出し、２人で練習したとおり家に向かって帰宅をしていきました。その姿が感動的で、あの時の情景を今でもよく覚えていますし、記憶から消えることはないと思われます。この子にとって大きなことは、施設で絶対的に自分を守ってくれる存在がなく育ちましたので、学校や児相や市役所、或いは病院など、この子に関わる場面にはいつも一緒に連れていって、やりとりをしっかりとわからせるようにしました。公的機関とのやりとりでかなりシビアになっても、こうしてお母さんはあなたを守っていくんだよ、絶対にあなたを守るんだよということを見せて、

気持ちを安定させるようにしました。うちの子は、施設での生活を送ってきましたので、私はこのような形の抱きしめ方をしてきました。

Ｑ３：子どもを受託して、家族の方の反応はいかがでしたか？

Ａ　「今まで私たち家族だけでやっていたのが、里子が入ることによって、実子たちが気を使えるようになったというか、私を含め良い勉強をさせていただいているなと痛感しています。末娘が『家に来てくれた子どもが本当に良かったと思えるような家庭にしてあげようね。』と言ってくれましたが、里子が入ることによって、思いやりの心がどんどん育っていくのがわかり、良かったなと思います。うちの主人は料理が得意なんですが、私がおむつをかえたりしている間に、ちょっと大変だなと思う時はさっさと料理をしてくれたりと、すごく協力的です。２人の娘たちが、朝夕の食事の時に一緒に手伝ってくれて、子どもたちに食べさせて協力してくれています。次男も結構仲良くやってくれています。」

Ｂ　「主人は、私の考えを話しますと、ではという事になり協力してくれました。カメラが好きなので､よく子どもと出かけては､たくさんの写真を撮ってくれています。また、私の実家は北海道にあるのですが、よく子どもを連れて行きました。里子との接触の中で、姪は作業療法士の道を選びました。甥は今ソーシャルワーカーを目指しています。『この子がきっかけになったんだよ。』という話を最近知りました。」

Ｑ４：養育家庭をやって大変だったことや苦労したことを教えてください。

Ａ　「幼児を預かるというのは、体力勝負なんですね。心もそうですが体力もないと駄目だと思います。主人は60歳で、私も若くないので、ちょっとついていけない面がありました。運動会なども一緒に行かないといけないのですが、ほかのお母さんが若いので、そこに入って同じようにやろうとしますが、すぐに地が出てしまって苦労しました。」

Ｂ　「あえて挙げるなら進路選択でした。うちの子は、養護学校に通っていましたが、進路について学校側のやりとりのなかで、少しおかしいと感じられることが多かったように思いました。次から次へと出てくる難問奇問を一つひとつ解決し、乗り越え、何とか問題をクリアして就職していますが、このような時にちょっと公的機関が入ってくださると苦労は半減し、子どもの道の開け方も違ってきます。」

Ｑ５：養育家庭をやって、感じた喜びや充実感を教えてください。

Ａ　「一緒に寝る時に、『お母さん大、大、大好き。』と言ってくれるのが、何よりの喜びです。一日の疲れがどっと消える気がします。あとは寝顔を見た時に、実子とはまた違う苦労をした分、可愛さが増すというところがあります。高２の子は、15歳で家に来たのですが、15年間でその子の性格ができ上がっちゃっているのです。これまで人から愛を受け入れていない分だけ、人に愛をどう返していいのかわからない面があり、お金や物で愛をもらっている分、本当の愛というものが育まれなかったんだろうなという気がします。だから、今は一方通行かもしれないけど、こちらから愛をもっともっとあげるしかないのかなと思っています。それと、信頼関係とともにコミュニケーションをしっかりとって、互いに心を開くようにすることがこれからの課題だと感じています。」

Ｂ　「『里子との生活はどうでしたか？』と言われたら、ただただ、楽しかったという言葉に尽きます。勤務先から、すっかり暗くなった道を、早くご飯を作って食べさせてあげたい気持ちで家に向かって歩く時、最もこの子どもと生活を共にしていることを強く感じます。体は疲れているはずなのに、暗い道で、『人生って楽しいなあ。』と、いつもいつも心が浮き立つように感じていました。

　また、小さい頃、朝お弁当をつくって、ご飯と副食と果物をタッパーに詰めてあげますと、それをぎこちない手で、タッパー３つを包んで重ね、デイバッグに入れる。そのしぐさを台所から見ているだけで、うふっふっふっとなる感覚でしたね。そういう胸中に笑いがこみあげる、子どもを抱きしめたくなるような楽しさがありました。」

Ｑ６：最後に、何かメッセージをいただけますか？

Ａ　「５歳と３歳という一番大事な時期に育てさせてもらっていることの荷の重さを痛感しています。一番甘えたい時期にママと離れて暮らし、小さな心を傷つけていくというか、私に甘えてくる切なさというか、だからこそ、できる限りの愛情を持って育ててあげたいと思います。日々『何で！』というようなことがたびたび起こりますが、その時は自分もすごく反省するんです。本当ならこの子は、ママに抱きついて思い切り甘えたりする時期なのに、それができなくてこうして離れ離れになっている現状、それを思ったら、こんな気持ちじゃいけないなといつも私は自分自身に言い聞かせています。本当にいい経験をさせていただいております。

　それと、やはりこういう子どもたちをつくらないことが重要だと養育家庭をやっていて強く感じます。今は、10代で結婚し、子どもができてもすぐに離婚してしまう人

たちが増えています。こうした実態のなかで、子どもたちが悲しい目にあうことが多くなっているように思います。そうならないためにも、子どもたちの実態を皆に理解してほしいです。」

Ｂ　「障害を持っている子でも、そうでない子でも、親のいない切なさは一緒です。親と生活を共に出来ないということは一つのハンデを背負いますが、障害を持っている子どもは親がいないということと、障害を持っていると言うことで二重のハンデを背負っています。その中で自立を考える時、健常なお子さんでさえ、今、18歳ではなかなか自立ができません。ましてや障害を持っている子に、『18歳で自立しろ。』と言っても無理であり、障害を持っている子どもに対しては、少しの間、措置延長があってしかるべきかと感じています。

　子どもにとって里親に恵まれるか否かは、その後の生活で天と地の差があるように思います。もし養育家庭をやろうかやるまいかと迷っていらっしゃる方がいらっしゃいましたら、それはやった方が良いと思います。養育が途中で挫折しようが、不調に終わろうが、それは構わないことと思います。例え、数か月、数年でも、親のいないお子さんが家庭を垣間見る体験をすることは、成長した時に必ず、何らかの良い意味で必ず心に残ります。私は今日お集まりになった方々にその辺をお伝えできたら良いと思っています。」

養育家庭制度は、いろいろな理由で親と一緒に暮らすことのできない子どもたちを養子縁組を目的としないで、家庭に迎え一緒に生活し、養育していただく里親制度です。

【ほっとファミリー（養育家庭）を、詳しく知りたい。】

★　申し込み資格はあるの？

○　**都内にお住まいで 25 歳以上 65 歳未満のご夫婦。**

※ただし、65 歳以上であっても短期条件付・レスパイト限定付にお申し込みできます。

配偶者がいない場合は、子どもの養育経験又は保育士や看護師の資格があり、かつ、養育の補助ができる 20 歳以上の子又は父母等が同居している方。

○　**居室が 2 室 10 畳以上ある。**

★　お預かりいただく子どもは？

○　**親の離婚、家出、病気、虐待等の理由で、親と一緒に暮らすことができない、おおむね 18 歳までの子どもです。**

★　お預かりいただく期間は？

○　**原則として 1 か月以上です。**

○　**2 年を超える場合、2 年ごとに子どもを継続して預かるかどうかの意思を確認させていただきます。**

★　養育に係る費用は？

○　**日常生活や教育費などの養育費は、児童養護施設等に入所している児童と同等の額が支払われます。**

○　**養育家庭への手当が支払われます。**

★　養育に必要な支援は？

○　**児童相談所が中心となって支援を行います。**

○　**養育に疲れた場合には、子どもの養育を一時的に休息できます。**

○　**ほっとファミリーどうしが集う相互交流の機会があります。**

○　**経験豊富なほっとファミリーが電話で相談に応じます。**

○　**研修などに参加し、養育に必要な知識を学ぶことができます。**

【養育家庭制度に関するお問い合わせ先】

東京都福祉保健局少子社会対策部育成支援課里親担当

〒163-8001　新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号

電話　０３－５３２０－４１３５

http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/ikusei/youiku/index.htm

ほっとファミリー　ホームページ

こちらのホームページもご覧下さい。
http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/
ikusei/youiku/index.htm

養育家庭体験発表集
平成19年10月発行

登 録 番 号(19)

発　行　東京都福祉保健局少子社会対策部育成支援課
東京都新宿区西新宿2－8－1
電話03(5320)4135　FAX03(5388)1406
印刷所